

社会を多角的に捉え、考察する力を育む授業実践

船戸 祐英（教育実践コース）

1 はじめに

社会は変化し続けている。世界中で多種多様な出来事が発生し、様々な要因や人々の思いが錯綜しているからである。その社会をどう学ぶのか。そこに、社会科を学ぶ価値があると筆者は考える。その価値とは、自分の生きている社会の過去や現状を知り、社会的事象に対する自分の解釈をもつことで、自分の生き方を探り方向づける根拠をもち、社会に関わり支えようとする契機になることだと考えている。その複雑な社会を生きる中で、一面的な解釈では社会的事象の本質を見抜くことができないため、社会科では、児童が社会的事象を様々な視点から捉えた上で、自分の考えを表現する授業実践が必要である。

2 目的

大学院1年から大学院2年までの2年間の実践に基づく知見から、児童の社会的事象の見方・考え方を働かせること、社会科における考える力に関する筆者自身の認識の変遷を考察する。そして、筆者が考える児童の社会科を学ぶ価値を見いだす。

3 社会的事象の見方・考え方を働かせることを意図とした授業実践

(1) 社会的事象の見方・考え方を働かせるとは
社会的事象の見方・考え方とは、小学校学習指導要領(平成29年告示)社会科編において、「位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して(視点)、社会的事象を捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること(方法)」であり、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会にみられる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の「視点や方法(考え方)」と示されている。この社会的事象の見方・考え方が、複雑な要因が錯綜する社会を理解するための1つのツールであり、社会的事象の見方・考え方を働かせることがその社会に対する自分の考えをもつことにつながると言える。

(2) 目的

社会的事象の見方・考え方を働かせる児童の姿を把握するために授業実践を行った。その姿が、教師のどのような働きかけによって現れたかを分析し、児童の見方・考え方を働かせる姿と教師の働きかけの関係を考察する。そして、児童の社会的事象の見方・考え方を働かせることへの筆者の捉えを見出すことを目的とする。

(3) 方法

筆者は、令和4年6月に実習校(国立大学の附属小学校)で、授業を構想し、実施した。単元は、3年生社会科の「市の様子」で、その中の「大きな駅のまわり」を2つの学級で各1時間ずつ実施した(以下実践①、実践②)。授業動画と発話記録から、小学校学習指導要領に示された社会的事象の見方・考え方と平成28年中教審答申で示された見方・考え方を参考に、その見方・考え方を働かせる姿が、実際の児童のどんな姿に現れているかを検討する。そして、その見方・考え方を働かせる姿に関わった教師の働きかけを抽出し、相互の関係を考察する。

(4) 授業の実践

① 実践①の実際

児童は、新潟駅周辺の航空写真を見たり、自分の経験をもとにしたりして身近な町の様子との違いを話し合った。その発表をもとに教師が学習課題「大きな駅のまわりがどんな様子なのだろうか」を設定した。次に、児童は、航空写真や路線図からビルや商業施設が多いこと、新潟駅から線路が広がっていることを読み取った。その後、児童は、同じ市内にある巻駅と新潟駅を比べた。巻駅を取り上げた理由は、児童の興味・関心を引くために担任教師の家の近くであったこと、同じ市内にあるが新潟駅と比べて、乗降者数が少なく、住宅や田んぼに囲まれていることを読み取るためである。教師は、この2つの駅を比べ、駅を中心に鉄道や道路が広がっていること、商業施設が集まることといった大きな駅の周りの特徴だけでなく、駅が交通の結節点であるため、人の行き来がしやすく、商業施設が集まるというその地域の特徴にまで児童が理解を深めることを目指した。

② 実践②の実際

教師が新潟駅と巻駅の1日の乗降者数を提示し、児童は乗降者数の違いから、学習課題「なぜ大きな駅に人が集まるのか」を設定した。次に、児童は、学習課題について予想し、建物、自然、交通、人の4つの視点から航空写真を捉え、新潟駅と巻駅のまわりの様子を読み取り、比較した。その後、教師が、電車やバスの路線図を提示し、児童は、新潟駅から交通が広がっていることを捉えた。それらを踏まえ、教師は、児童に大きな駅のまわりに人が集まる理由について考えさせた。

(5) 考察

社会的事象の見方・考え方を働かせる児童の姿と教師の働きかけについて、実践を分析した成果として、以下の2つが挙げられる。

1つ目は、分析から児童の社会的事象の見方・考え方を働かせる具体的な姿と教師の働きかけに関連が見いだされたことである。実践①での児童の発言から、児童は土地利用や分布位置や空間的な広がり視点を生かして新潟駅の周りの様子を捉えていた。この姿に関わる教師の働きかけは、位置や空間的な広がり視点・事象や人々の相互関係視点につながる建物、自然、交通、人の視点を児童と共有したことだと考える。また、シュリヤの「新潟駅は、店がたくさんあるから、新潟駅に旅行とかで来る人がいそう」は、事象と人々の相互関係視点を生かして、新潟駅の周りの様子を捉え、駅の周りや人々の動きを関連付けて、大きな駅の周りに人が集まる理由を考えている。この時の教師の働きかけは、「〇〇と□□を比べて、どんな違いがありますか」という発問や新潟駅と巻駅の航空写真を提示し比較する活動と比較を促す発問や活動であった。この学習活動によって、児童は、2つの駅の様子から、大きな駅の特徴を見出していた。これは、教師の発問によって、読み取った事実を比較し、関連付けた発言であると考えられる。

2つ目は、児童が社会的事象の見方・考え方を働かせる教師の働きかけの共通点が見いだされたことである。建物、自然、交通、人という視点を児童と共有したことは、位置や空間的な広がり視点、事象や人々の相互関係の視点が含まれた働きかけとなっていた。「〇〇と□□を比べて、どんな違いがありますか」という発問や2つの駅の航空写真を提示し比較する活動では、比較する思考が含まれた働きかけとなっていた。

以上を踏まえ、筆者は、児童の社会的事象の見方・考え方を働かせることは、日常生活では働かず、

授業において、教師の働きかけや児童が資料を見るなど、児童に刺激が与えられたときに、見方・考え方が働き、考え始めることだと考えた。

課題は、児童の社会的事象の見方・考え方を働かせる姿を発言や記述といった考えた結果から見取ることができたが、その考えに至る経緯を見取ることができなかったことである。

5 児童の社会的事象の見方・考え方を働かせることを促す授業実践

(1) 前回の実践を踏まえて

1つ目は、小学校学習指導要領と平成28年中教審答申をもとに、本単元における具体的な視点を設定した。その視点から学習課題を設定するなど、単元を構想した。これは、前回の実践での教師の働きかけと児童の姿の関係性から設定した。2つ目は、思考ツールを活用したことである。思考ツールとは、自分の頭の中にある思いや考えを視覚的に表すものである。児童が思考を可視化し教師が児童の思考過程を見取り、児童が関連付ける、総合する姿を促すために活用した。3つ目は、一枚ポートフォリオ（以下OPPシート）を活用したことである。OPPシートは、あらかじめ構成されたシートに、学習者が求められた情報を記述する方法であり、授業全体の履歴が一枚のシートに書かれ、学習内容が一覧できるものである。児童が、思考を可視化して、単元間の授業を関連づけた考えを生み出すことができると考えた。

(2) 目的

本実践では、児童が思考ツールとOPPシートを活用した授業を構想し、実施した。児童の社会的事象の見方・考え方を働かせる姿を分析することを通して、「児童が社会的事象の見方・考え方を働かせること」を促す授業づくりの要素について考察し、児童の社会的事象の見方・考えを働かせることへの筆者の捉えを再考する。

(3) 方法

令和4年12月に、実習校(公立小学校)の6年生社会科で、単元「明治の新しい国づくり」(全8時間)を筆者が計画、実施した。本単元における見方・考え方の具体的な視点や考え方をもち、各時間のOPPシートの記述を対象に、全体の児童に対する社会的事象の見方・考え方を働かせた記述の割合を調べる。その見方・考え方を働かせた児童の振り返りや思考ツールの記述をもとに、児童の思考過程において、社会的事象の見方・考え方を働かせる姿を分析し、児童が見方・考え方を働かせることを促す授業づくりの要素を考察する。

(4) 単元の実際

本単元では、1時間目は、児童が、単元を通した学習課題「江戸時代後期の20年間で、社会がなぜ大きく変化したのか」を立て、予想し、学習の見通しをもった。2～7時間目は、単元を通した学習課題の解決に向けて、知識を獲得する時間とした。その中で、2～3時間目は幕末の内容の知識、4～7時間目は明治政府が樹立後の明治初期の知識を獲得し、単元を通した学習課題への手掛かりにした。そして、8時間目は、今までの学習を踏まえて、自分の考えをまとめる時間とした。その単元の中で、8時間目では、単元を通した学習課題に対する自分の考えをもつためにクラゲ・チャートを活用した。

(5) 考察

本実践の成果として2つを挙げる。

1つ目は、本単元における具体的な見方・考え方の視点や考え方を設定し、その視点や考え方を組み込んだ単元を構想できたことである。

2つ目は、児童が思考ツールを活用するだけでなく、教師が、視点や考え方を促す資料提示をすることで、社会的事象の見方・考え方を働かせる姿を促せたことである。

以上を踏まえて、児童が資料を読み取ったり、学習課題を予想したりと社会科学習の多くの場面で社会的事象の見方・考えを働かせる児童の姿が見られたことから、日常生活でも児童は同じように見方・考えを働かせると考えた。社会的事象の見方・考えを働かせることで、社会的事象の本質的な理解ができることが分かった。このことから、筆者は、児童の社会的事象の見方・考えを働かせることを、その見方・考え方を働かせることで、社会的事象の本質的な理解につながると考えた。

6 児童が社会的事象の見方・考え方を、自分自身の見方・考え方として働かせる授業実践

(1) 前回の実践の成果と課題を踏まえて

1つ目は、教師が、社会的事象の見方・考え方の視点を意識した授業デザインを組むために、単元における具体的な視点を設定したことである。そして、本単元における中心概念を捉えるために、その具体的な視点を取り入れた問いと獲得した知識を中心に構想した。2つ目

は、具体的な視点をもとに「〇〇の目」を設定し、児童に視覚的な提示と意味の共有をしたことである。本単元では、授業で扱う視点を



図1 自然の目

もとに、5つの「〇〇の目」を設定した。例として、図1の「自然の目」を挙げる。この目で、「米づくりに適した地形」「米づくりに適した気候」といった自然条件から米づくりを捉えることを児童と共有した。視点を児童が使いこなすことにつながると考えた。3つ目は、OPPA評価と社会科振り返りシートを活用し、記入する時間を確保したことである。本単元では、社会科振り返りシートを活用し、単元を通した学習課題と本時の学習を往還し、授業で得た見方や知識を総合し、関連付け、蓄積した知識や情報を根拠に、単元を通した学習課題に対する自分の考えをもつことを目的とした。前回の実践で、記述する時間の不足と活用に課題があったため、OPPAに重きを置いた。

(2) 目的

本研究では、社会的事象を多角的に捉える視点を児童と共有し、単元内の学習内容を関連付け総合し、自分の考えを表現する授業をデザイン、実践する。この実践を通して、児童が、社会的事象の見方・考え方を自分自身の見方・考え方として働かせる授業づくりの要素を考察する。そして、児童が社会的事象の見方・考えを働かせることの筆者の捉えを再考する。

(3) 方法

令和5年7月に実習校(公立小学校)の5年生で、単元「未来を探る 2030年の日本の食料生産～米づくり編～」(全11時間)を構想、実施した。ただし、9、10時間目は、筆者と授業内容を話し合った上で、同学級の担任教師が構想、実践した。教師が想定した単元を通した社会的事象の見方・考え方を働かせた姿に至るまでの学習過程で、どのような社会的事象の見方・考え方を働かせている姿が現れたかを分析する。その分析と実践全体の振り返りから、児童が、社会的事象の見方・考え方を自分自身の見方・考え方として働かせる授業づくりの要素を考察する。

(4) 単元の実際

単元では、南魚沼市と新潟市の米づくりの特徴と、それぞれの地域の課題や取り組みから、日本の米づくりへと視野を広げ、構築した知識や見方を総合し、関連付けて未来予測を行うことを目標とした。

1時間目で、単元を通した学習課題「2030年の日本の米づくりは、どのように変化しているのだろうか」を設定した。2～10時間目は、単元を通した学習課題の解決に向けて、多角的に米づくりを捉え、知識を構築する時間とした。その中で、2～7時間目は、南魚沼市と新潟市の米づくりの特徴

から、日本における山間部と平野部の米づくりの手法や現状などを追究する。次に、8時間目では、2つの地域の特徴を比較し、現段階での単元を通じた学習課題への自分の考えを表現した。9、10時間目では、日本に視野を広げるために、消費者のニーズの変化やニーズに合わせた取り組みを追究した。最後に、11時間目では、単元を通じた学習課題に対する自分の考えをまとめる時間とした。

その単元の中で、児童は、「〇〇の目」から知識を分類したり、2つの地域の特徴を比べる際に活用したりする姿が見られた。また、社会科振り返りシートは、児童が、自分の考えをもつ際のオリジナルの資料としての機能があった。振り返りシートには、「今日の授業で、一番大切だと思ったことは？」と、各授業の中で、児童が情報を選択し、蓄積していったからである。しかし、蓄積した情報を総合したり、関連付けたりする姿は、児童の記述から見られなかった。

(5) 考察

本研究では、成果として、以下の2つを挙げる。

1つ目は、各授業における児童の社会的事象の見方・考え方を働かせている姿は、情報を比較、分類、関連付け、知識を構築することと関係があることが分かった。2つ目は、「〇〇の目」として、本単元における具体的な視点を児童の実態に合わせて設定することで、児童が、社会的事象をさまざまな視点から捉えることができたことである。

課題は、「〇〇の目」に、本単元における複数の具体的な視点を含んでいたため、同じ視点でも複数の立場を含む視点があったことである。「売り方の目」の中でも、生産者の思いや消費者のニーズの視点を示すことで、それぞれの立場に立った考えが児童から出た可能性がある。

7 総括

(1) 社会科における情報、知識、考えに対する筆者の認識の変化

2年間を通して、知識は、事実という起きた出来事に関連付けるなどして獲得されるものから、知識は、事実や数値といったデータを含んだ情報に関連付けるなどして構築されるものに変化した。それに伴い考えは、獲得した知識を活用して自分の考えをもつことから、構築した知識を根拠に自分の考えをもつことに変化した。

(2) 児童の社会的事象の見方・考え方を働かせることの認識の変化

まず、社会的事象の見方・考え方に関して、小学校学習指導要領や先行研究の検討から、筆者は、

2年間を通して、社会的事象を考察・構想する際の1つのツールであるという捉えであった。次に、2年間を通して、「児童の社会的事象の見方・考え方を働かせること」の捉えが、児童のその見方・考え方を働かせることを教師が促すことという認識から、見方・考え方を自分自身の見方・考え方として児童が働かせることという認識が変わった。

(3) 社会科における考える力について

2年間を通して、「社会的事象に対する自分の考えを他者と関わる中で自分の考えを柔軟に更新する力」であるという認識から、「まず、自分の考えをもつことが重要であり、そのときに、社会的事象を多角的に捉えた上で、考察する力を育む必要がある」という認識へと変わった。

これらから、社会科に対する知識重視の捉えから、情報からいかに知識を構築して考えるといった思考重視の捉えに視野が広がったと言える。

8 今後の展望

本研究では、様々な視点から社会的事象を捉え、情報や知識を関連付けることに重きを置いた。その結果、情報や知識を関連付けるだけで、その妥当性を学級集団で検証することがほとんどなかった。そこで、情報や知識に関して文献で再検討したことを踏まえ、それぞれの妥当性を高めるために、3つの要素を今後の実践で重要視する。

1つ目は、児童が、情報の妥当性を高めるために、情報を検証することである。2つ目は、児童自身が情報から知識を構築することである。児童が、複数の情報に関連付け知識を構築することで、社会的事象の本質的な理解へとつながると考えたからである。3つ目は、知識の妥当性を高めるために、他者と自分の捉えた知識を共有し、検討することである。妥当性の高い情報から構築した知識であっても、それは児童が主観的に構築した知識であるため、必ずしもその知識が正しいとは限らないからである。この3つの要素を取り入れ、児童が、情報や知識の妥当性を高めた上で、社会的事象の見方・考えを働かせ、知識を構築することを目指す。それが、社会的事象を考察する力にもなり、他者との関わりの中で、自分の考えを更新する力を育むことにつながると考えた。

以上のことから、社会科を学ぶ価値は、児童が、社会的事象を多角的に捉え、自分の生きる社会を知り、他者と関わりながら知識を構築し社会的事象を考察することで、自分の生き方を決める根拠や社会に関わろうとする契機になることだと考えられる。